

## Ⅱ. 民俗文化財

沖縄本島北部及び周辺離島の民俗文化財

沖縄本島中部及び周辺離島の民俗文化財

沖縄本島南部及び周辺離島の民俗文化財

宮古諸島の民俗文化財

八重山諸島の民俗文化財

# 本島北部及び周辺離島



伊平屋村

- 伊平屋村島尻の神あしあげ (p121)
- 伊平屋村我喜屋の神あしあげ (p120)

伊平屋島

- 伊江島の村踊 (p126-127)

伊江村

伊江島

伊江島空港

伊是名村

伊是名島

- 伊是名村諸見の神アサギ附拝所 (p122)
- 伊是名村仲田の神アサギ附宅地 (p123)
- 伊是名村伊是名の神アサギ附拝所 (p124)
- 伊是名村勢理客の神アサギ附宅地 (p125)

屋那覇島

水納島

瀬底島

本部町

- 名護市我部祖河の高倉 (p110-111)
- 安和のくばのうたき (p112)
- 屋部の八月踊り (p114-115)

- 沖縄の綱引き (p204-207)

沖縄各地



恩納村

金武町

伊豆C.I. 金武C.I.

屋部C.I. (那覇方面のみ)

谷村



●沖縄北部のウングミ(p98-99)

- 国頭村
- 大宜味村
- 名護市
- 今帰仁村
- 伊平屋村
- 伊是名村

●安田シヌグ(p102-103)

●謝名のアーチ獅子(操り獅子)(p108-109)

●湧川の路次楽(p106-107)

古宇利島

●塩屋湾のウングミ(p104-105)

●操り獅子(p100-101)

- 名護市
- 本部町
- 今帰仁村

●宜野座の八月あしび(p116-117)

●宜野座の京太郎(p118-119)

凡例

- 国指定 重要無形民俗文化財
- 国選択 記録作成等の措置を講ずべき無形の民俗文化財
- 県指定 有形民俗文化財
- 県指定 無形民俗文化財

道路凡例

- 331 国道
- 62 県道主要地方道
- 10 県道一般道
- 沖縄自動車道
- ..... 市町村境界線

## 民俗文化財とは？—意外と身近にある文化財—

皆さんは、地域の祭りや行事に参加したことはありますか？もし、参加したことがなくても、豊年祭や綱引き、ハーリーやエイサーなどを写真や映像で見たことがあると思います。これらは「無形民俗文化財」と呼ばれるもので、地域の祭りや行事などの風俗慣習、民俗芸能、民俗技術の3つに分けられます。

小学校3年生の社会科には、「昔の道具と暮らし」という学習があります。この学習のために地域の博物館や資料館を訪れたり、昔の道具類を見たり調べたり、使う体験をしたことがあるのではないのでしょうか。「民具」と呼ばれる道具類のほか、地域の神聖な場所である御嶽や、地域の祭りや行事で祈りを捧げる場となる神アサギなどの祭場、人々の生活を支えた井戸など、暮らしを取り巻く「形のあるもの」が、「有形民俗文化財」と呼ばれます。

なぜ、私たちの暮らしに関わるものが、文化財として大切にされるのでしょうか。

無形民俗文化財にあたる各地の豊年祭などの祭りや行事、そこで奉納される民俗芸能には、地域で受け継がれてきたものの見方・考え方が反映されています。

例えば、沖縄には「ユガフー（世果報）」という言葉があり、豊年・豊穰・幸福を表します。このユガフーは、海の彼方にあるニライカナイから来訪する神（来訪神）によってもたらされると考えられています。よく知られている来訪神は、宮古島のパーントゥや各地の豊年祭のミルク（弥勒）でしょう。来訪神は、仮面や草木などを身にまとった異形の姿（普通とは違う姿）をして目に見える形で現れます。各地の豊年祭などの祭りや行事、奉納される民俗芸能には、ユガフーや来訪神の考え方が表れています。

また、ジュールクニチ（十六日）やシーミー（清明祭）は、墓前で祖先を祀る行事として、広く知られています。これらの行事では、墓前で重箱料理や餅、酒や線香を供え、ウチカビ（紙銭）を焼いて拝んだ後、料理を食べます。祖先を祀る行事には、沖縄の人々が祖先を大切にする考え方が表れています。

つまり、祭りや行事、民俗芸能を無形民俗文化財として守っていくことは、祖先から受け継がれてきたものの見方・考え方を理解し、守り受け継ぐことだと言えるでしょう。

「生活の中で伝統的に使われてきた物」である有形民俗文化財には、様々な種類があります。博物館や資料館に展示されている昔の道具類は、今では使われなくなったものがほとんどです。一方で、神アサギなどは、今でも地域の祭りで祈りを捧げる場として使われているものもあります。暮らしの中で伝統的に使われてきた物たちが、なぜ文化財となるのでしょうか。それは、有形民俗文化財が「人々がどのような暮らしをしてきたか」を読み解くものだからです。現在、社会が大きく変化し、私たちの生活は、昔と大きく変わりました。しかし、現在は過去があつてのものです。過去の地域の暮らしを知り、理解することで、より深く自分の住む地域のことを理解できます。そのきっかけを作ってくれるのが、有形民俗文化財なのです。

このように、私たちの「ものの見方・考え方」を理解し、地域を深く理解するために欠かせない民俗文化財は、身近にあるためにその大切さを見落としてしまうことがあります。皆さんの住んでいる地域にも、たくさんの民俗文化財があるはずです。ぜひ、参加したり、訪れたり、見たりして、民俗文化財に触れてみてください。

## 【無形民俗文化財の 変容と継承について】

地域の祭りや行事などの風俗慣習や民俗芸能は、時代を経て少しずつ変化していくこともあります。例えば、祭りも琉球国時代や戦前と現在では、内容が変わっているものもみられます。社会が大きく変化した現在では、祭りを執り仕切る神役たちの継承が困難になり、祭りや行事の縮小や簡素化が行われることもあります。民俗芸能でも、後継者不足などで演じられる演目が少なくなったりする場合があります。一方で、祭りや行事の担い手に地域以外の人々の協力を得たり、皆が参加しやすい土日に祭事期日に移すこともあります。また、性別や年齢による区分を取り払ったり、子どもたちの参加の場を作る場合があります。このように、各地で継承に向けての工夫により変化がみられることもあります。

なぜ、無形の民俗文化財は少しずつ変わっていくこともあるのでしょうか。それは、無形の民俗文化財は人が行うものだからです。形やあり方は少しずつ変わっていったとしても、地域の祭りや行事、民俗芸能の持つ意味合いを受け継ぐ努力が続けられています。

## 【民俗文化財の解説文について】

本書の民俗文化財の解説文は、基本的に、指定当時の解説をもとにしています。文化財指定を受けた理由や背景を皆さんに理解してもらうためには、指定当時の様子を知ってもらうことが必要なのです。

有形の民俗文化財は、指定当時の状態を保存していくため、指定当時と変わらないものです。しかし、無形の民俗文化財は少しずつ変化していくこともあることから、解説文にある内容と現在の状況が異なっている場合もあります。この解説文を読んで、実際に自分の目で見て、どのように変化しているのかを探してみるのも、文化財の保存・継承への理解につながる一つの方法ではないでしょうか。

## 沖縄北部のウンガミ

国選択

● 選択年月日 / 1992(平成4)年2月25日

## ● 所在地

国頭村、大宜味村、名護市、今帰仁村、伊是名村、伊平屋村

## ● 祭事期日

旧暦7月亥の日を中心とした数日間

国選択記録作成等の措置を講ずべき無形の民俗文化財

沖縄本島北部とその周辺離島に伝承されているウンガミ(ウンジャミ、ウンザミ、ウンギャミなどとも呼ばれる)は、毎年旧暦7月の亥の日を中心に数日間行われる海神を祀る行事です。沖縄本島では国頭村、大宜味村、名護市、今帰仁村に、離島では古宇利島、伊是名島、伊平屋島に伝承されています。

ウンガミは海の神を意味しますが、行事には、海の神だけでなく山の神が登場する一面もあります。これは、海の神と山の神の和合が、住民に豊穰(豊かな実り)をもたらし、繁栄につながると考えられているからです。

このようなウンガミの諸行事は、地域ごとの祭祀を執りまとめるノロやニーガン(根神)と呼ばれる女性のカミンチュ(神人)たちを中心に行われてきました。北部地域のウンガミでは、海の神を迎える儀礼があり、祭りの終わりには海に向かって神を送る儀礼であるナガリが行われます。神を迎えた後は、神の祝福を受けるため、猪狩り、網漁、イルカ突き、舟漕ぎなどを模倣した儀礼が行われます。また、村人の熱狂的な応援の中で、実際に舟漕ぎ競漕を行う地域もあります。夕方、祭りが終わると神を送る儀礼であるナガリが行われ、その後、アサギナー(神アサギ前の広場)で女性たちによるウシデークが演じられます。

様々な儀礼と芸能が伝えられるウンガミは、わが国の伝統的な民間信仰のあり方を伝える貴重な行事であり、沖縄を代表する民俗行事の一つです。



国頭村比地のウンジャミ

## 用語の解説



## ノロ

用語集 P227参照

## ニーガン(根神)

用語集 P227参照

## カミンチュ(神人)

用語集 P224参照

## ウシデーク

用語集 P224参照



今帰仁村古宇利島のウンジャミ



伊平屋村田名のウンジャミ



大宜味村根路銘のウンガミ



大宜味村謝名城のウンガミ



あやつ  
操り獅子

国選択

●選択年月日／2004(平成16)年2月6日 ■保護団体／名護市川上区、伊豆味区あやつり獅子舞保存会、謝名アヤーチ獅子保存会

## ●所在地

名護市川上、本部町字伊豆味、今帰仁村字謝名

## ●祭事期日

不定期(以前は旧暦8月8日の豊年祭で演じられた)  
(名護市川上)5年廻り(実施年から数えて5年目)ごとの旧暦8月11日  
(本部町字伊豆味)5年廻り(実施年から数えて5年目)ごとの旧暦8月15日  
(今帰仁村字謝名)

あやつ じしは、なご がわがみ くにがみ ちとあ  
操り獅子は、名護市川上、国頭郡本部町  
いさみ くにがみ せきじん じまな ちいさ  
字伊豆味、国頭郡今帰仁村字謝名の3地域  
で伝承されている糸繰りの獅子舞です。い  
ずれも、豊年祭の奉納踊りの最終演目とし  
て演じられています。あやつ じしは、ほうのうぶと  
操り獅子は、奉納踊  
りが上演されるバンクと呼ばれる舞台上  
に、獅子を遊ばせる小さな台を設けて行わ  
れます。2頭の獅子は、舞台中央に吊り下  
げられた玉を中心に向かい合うように置か  
れ、さんしん せんそう  
三線などの演奏に合わせ、最初はゆっ  
くりと、次第に激しく、玉に飛びつくよう  
に動かされます。

いとぐ ほうこ は、じし 1頭につき1人で  
行います。獅子の頭とお尻には1本ずつ糸  
が結び付けられ、この糸は、ぶたい てんじょう  
舞台の天井に  
取り付けられた竹などの棒の上を渡し、舞  
台の後方に延ばされています。操作する人  
は、左右の手にそれぞれ1本ずつ糸を握り、  
なげ 激しく上下に動かすなどして獅子を操り  
ます。

じしは竹ひごと縄で骨格を作り、竹ひご  
と縄に糸芭蕉を結びつけて胴体とします。  
あやつ 操るために多少の重みが必要となるため、  
4本の足先にこうか  
硬貨を数枚結び付けていま  
す。頭には、軽いデイゴの木が多く用いら  
れます。

あやつ じしは、日本の人形芝居の中では珍  
しいいとぐ  
糸繰りによるものであり、また、豊年  
祭の中で重視されている獅子舞を糸繰りで  
演じるなど、芸能の移り変わりの過程や地  
域的特色を示しているきちょう びんせく  
貴重な民俗芸能です。



本部町字伊豆味の操り獅子





名護市川上の操り獅子



本部町字伊豆味の操り獅子



今帰仁村謝名のアヤーチ獅子(操り獅子)

なまじんさんしやな  
今帰仁村謝名のアヤーチ獅子  
(操り獅子)は県指定無形  
民俗文化財になっているよ。



# あだ 安田のシヌグ

国指定

●指定年月日 / 1978(昭和53)年5月22日 ■保護団体 / 安田古文化財保存会

●所在地  
国頭村字安田

●祭事期日  
隔年(一年おき)の旧暦7月最初の亥の日

シヌグは、沖縄本島北部とその周辺離島に伝承されている神を迎えて豊年を祈る祭りです。

安田のシヌグは祭り当日の朝に祈願を行い、午後からはヤマヌブイという儀礼が行われます。ヤマヌブイは、集落の男性たちがササ、メーバ、ヤマナスの3つの山へ登り、つる草や木の葉で頭や体を飾って神を迎え、集落に降りて人々を祓い、最後に海で神を送り出す儀礼です。山から下りてき



ウシデーウ

た男性たちは、集落の入口で女性たちに出迎えられ、神アサギ近くの畑に集まっている女性たちを囲み、木の枝で打ち祓います。また、アサギマー(神アサギ前の広場)でも、出迎えた人々を囲んで打ち祓います。人々を祓った後、男性たちは浜へ移動して海に入り、身にまとっていたつる草や木の枝を



ヤマヌブイ

捨てます。その後、ウイヌハー（上の川）で体を洗い、カチャーシーを踊って儀式が終了します。

夕方には、アサギマーでタークサトゥエー（田草取りの演技）、ヤーハリコー（舟の修理や進水の様子を表した演技）、女性たちが円陣を組んで歌い踊るウシデークが行われます。結婚している女性は白鉢巻と紺地の着物、結婚していない女性は白の長い鉢巻と白地の胴衣と下裳を身につけ、十数曲を踊ります。このウシデークは、2日目の祈願の後も行われます。

安田のシヌグは、祓い（清めること）や山の神・海の神信仰に沖縄らしさを見せ、そこで演じられる踊りの手に沖縄舞踊の原型が認められるなどの特徴があります。



神アサギ近くの畑で女性たちを載う



ヤーハリコー



タークサトゥエー



ウシデーク



ウシデーク

## 用語の解説



### 神アサギ

沖縄本島北部の各村に設けられた村落祭祀のための建造物。「琉球国由来記」（1713年）には、「神アシアゲ」と記されている。壁や窓もなく、腰をかがめて出入りするくらい軒が低い造りとなっている。

## 塩屋湾のウンガミ

国指定

●指定年月日 / 1997(平成9)年12月15日 ■保護団体 / 田港区、屋古区、塩屋区、白浜区

## ●所在地

大宜味村字田港、屋古、塩屋、白浜

## ●祭事期日

旧盆明けの初亥の日を中心とした3日間

## ●その他

1992(平成4)年2月25日に「記録作成等の措置を講ずべき無形の民俗文化財」の「沖縄北部のウンガミ」として国に選択

沖縄本島北部とその周辺離島では、旧盆明けの初亥の日前後に、ウンガミと呼ばれる行事が行われています。ウンガミは「海神」の意味で、海神を祀る行事であると考えられています。

塩屋湾のウンガミは、大宜味村の田港区、

屋古区、塩屋区、白浜区の4つの字で行われる行事で、1年交代でウグンマール(御願廻り：御願年のこと)とウドゥイマール(踊り廻り：踊り年のこと)が行われます。

ウグンマールは神事が中心で、供物も多く、ウンガミの翌日には、ハミンチュ(神人)が集落の安全や健康を祈願するヤーサグイという行事が行われます。ウンガミの初日は、田港アサギ、屋古アサギ、兼久浜での神事、御願バーリー、奉納角力が行われます。白浜では、ウンガミの日の夕方に、村人たちが旗頭を先頭に公民館前に移動し、様々な芸能を上演します。



屋古アサギでの儀礼\*

## 用語の解説



### ハミンチュ(神人)

神人は、各地域の方言でカミンチュやハミンチュなど呼ばれ、村落祭祀を執り行う人たちのことである。神役はとくに神人の役職を指す場合の用語として用いられる。神人には女性神人と男性神人がいて、女性神人の方が儀礼上の地位が高い。最高位の女性神人はノロと呼ばれる。

### サーサ(サーサイ)

ウングミ終了の報告と感謝を祈願する行事。

ウドゥイマールでは神事が簡略化され、翌日のヤーサグイの行事を行いません。2日目の午後には、塩屋のアサギマー(神アサギ前の広場)で、太鼓による地謡に合わせた女性のみの踊りが行われます。田港と屋古では、サーサ(サーサイ)という行事が行われます。

塩屋湾のウングミは、沖縄の伝統的な民俗信仰のあり方を伝えるとともに、沖縄本島北部に分布するウングミを代表する行事として重要なものです。



屋古アサギでの祈願



シナバ(青年浜)に向かってハーリーを漕ぐ\*



兼久浜での祈願



ハーリー舟を迎える女性たち\*

\* (写真提供：大宜味村)

わくがわ ろじがく  
湧川の路次楽

県指定

●指定年月日 / 2002(平成14)年1月18日 ■保存団体 / 湧川路次楽保存会

●所在地  
今帰仁村字湧川●祭事期日  
旧暦8月の村踊り

路次楽は、中国伝来の道中楽(道中で行進しながら演奏する)で、ガク(哨唎)と呼ばれる管楽器などを用いて、琉球国王の道行の「さきぶれ」として演奏されました。

伝承によると、湧川に路次楽が伝わったのは、18世紀中期から19世紀にかけて、王府の楽師であった與儀家の祖先が湧川に移り住み、村踊りに取り入れられてから



集落内を練り歩く道ジュネーでの路次楽

だといわれています。

今日、湧川では、旧暦8月の村踊りの主要演目の一つとして、路次楽が演じられています。曲目には、銅鑼・太鼓・ガクで



豊年祭舞台での路次楽

演奏する「サーサーガク」、太鼓・ガクで演奏する「太鼓ガク」、ガクのみで演奏する「揚ガク」の3つがあります。ガクは、リュウキュウハリギリ（沖縄固有種の高木）などを利用し、與儀家に伝わる独特の製法に

よって作られます。

湧川の路次楽は、村踊りを特色づけるものであり、農村社会において外来文化が受容された過程を示すものとして貴重な芸能です。



1990年頃の路次楽\*



ガク吹き



1990年頃の路次楽\*

\* (写真提供：今帰仁村教育委員会)

# 謝名のアヤーチ獅子(操り獅子)

県指定

●指定年月日 / 2002(平成14)年1月18日 ■保存団体 / 謝名アヤーチ獅子保存会

●所在地  
今帰仁村字謝名

●祭事期日  
5年廻り(実施年から数えて5年目ごと)の  
旧暦8月13日、15日

●その他  
2004(平成16)年2月6日に「記録作成等の措置を講ずべき無形の民俗文化財」の「操り獅子」として国に選択

謝名のアヤーチ獅子(操り獅子)は、体長(頭から尾までの長さ)70cm、胴回り85cm、体高(立った時の足から頭頂までの高さ)45cmほどの雌と雄の小型獅子で、2本の糸で操ります。

アヤーチ獅子の由来や起源は定かであり

ませんが、今日では、5年廻り(実施年から数えて5年目ごと)の八月踊りの13日と15日に最後の舞台演目として演じられています。舞台上に特設された長い台の上で雄と雌2頭の獅子が向き合い、三線や太鼓の音に合わせて、中央につるした1個の黄金の玉に噛みつこうして、飛び跳ね、踊り、じゃれ合います。舞台の裏方は、獅子を操る人や三線・銅鑼・太鼓・法螺などの地謡数人からなります。

謝名のアヤーチ獅子は、八月踊りを特色づけるものであり、県内でも珍しい民俗芸能の一つとして貴重なものです。







# なごしがぶそか たかくら 名護市我部祖河の高倉

県指定

●指定年月日 / 1967(昭和42)年4月11日 ■所有者 / 個人所有

●所在地  
名護市宇我部祖河

高倉は、床を高くして風通しを良くし、湿気やネズミなどから穀物を守る工夫をした倉です。支え柱は、建物の大きさに応じて4、6、8、9本などとし、屋根は、茅葺きで作られます。我部祖河の高倉は、宮城家の屋敷内に建てられ、高床を9本の柱で支え、屋根は竹茅葺きです。『中山伝信録』(1721年)に「米を蔵むる倉にして、また地を懸れること4、5尺」とあるよう

に、床高は約1.5～2mです。

日本で発掘される弥生式土器や銅鐸などに描かれる床を高くした倉との類似性が指摘されていますが、その形式は地域により異なっています。南西諸島では、与論島を除く奄美諸島は奄美式とされ、与論島以南は沖縄式ともいわれます。

県内では、かつて多くの倉が建ち並んだものをブリグラ(群倉)といい、沖縄各地にみられましたが、ほとんどが失われてしまいました。伝統的な様式で造られた高倉としては唯一現存するものであり、とても貴重です。



## 用語の解説



### 茅葺き

茅(ススキなどのイネ科植物)で屋根を葺くこと。または、その屋根自体を指す。

### 中山伝信録

中国・清の官僚である徐葆光が、尚敬王の冊封副使として来島した時に見聞した内容を記録したもの。1721年に刊行された。琉球国の制度から風俗まで見聞した内容が詳しく記述されている。

### 銅鐸

弥生時代に製造されたつり鐘型の青銅器で、祭りの道具として用いられた。



9本の柱で支えている



高倉の内部



軒下



壁面



竹茅葺

# あ わ 安和のくばのうたき

県指定

●指定年月日 / 1973(昭和48)年7月30日 ■所有者 / 安和区

●所在地  
名護市宇安和

うたきは村を守護し、村人に祝福をもたらす神に関する聖地で、神女たちが祈願をしたり、祭りを行ったりするところです。普通「御嶽」という字を当てます。

安和は、名護市の最も西の地域に位置し、安和岳と嘉津宇岳のふもとにあります。くばのうたきは、「村のふさでの御嶽」と呼ばれるように集落のすぐ背後の標高50mくらいの丘にあります。地元の人々は、

「くばのうたき」と呼びます。

このうたきには、聖木と称されるクバ(ピロウ)の木が200本余りも群生し、村人の信仰のよりどころとなっています。うたきの中には、イビへの遥拝所(遠く離れたところから拝む場所)、イビ、ノロ墓などもあり、うたきの形式がきちんと備わっています。



## 用語の解説



## イビ

御嶽の奥まったところにあるもっとも神聖な場所のこと。

## ノロ墓(ヌルバカ)

ノロを葬ったと伝えられる墓のこと。村の祭祀を執り行うノロは、亡くなると家族とは別の墓に葬られることもあった。

## 神アサギとはどのようなもの？

神アサギは、沖縄県内では12件が有形民俗文化財として指定されています。内訳は県指定6件と市町村指定6件です。沖縄本島北部の今帰仁村や本部町ならびに伊平屋村・伊是名村に所在する神アサギです。指定名称は神あしあげ、神アサギ、神ハサギなど地域により様々です。以下、ここでは「神アサギ」と表記しますが、この神アサギとはどのような祭祀施設(祭場)なのでしょう。

神アサギは、一般には沖縄本島北部地域や伊平屋村・伊是名村などの村落に設けられた村落祭祀のための建造物をさしますが、祭祀場所をさすという意見もあります。神アサギの呼称は様々です。地域の方言によってカミアサギ、カミアシャギ、カンサギ、カミハサギなどとも呼ばれ、王府が編纂した『琉球国由来記』(1713年)には「神アシアゲ」と記されています。

神アサギは一つの村落に一つの神アサギがあるのが通例です。神アサギは『琉球国由来記』に記載された数は、離島まで含めると120箇所以上になります。沖縄本島中南部では12箇所、「神アシアゲ」「神アシアゲノ殿」、「真栄平アシアゲ」のように「地名＋アシアゲ」と表記されたものの合計です。この数字から中南部では神アサギは少なく、恩納村以北の北部地区に多いことがわかります。神アサギはさらに北上して鹿児島県の奄美諸島にも分布していて、このことは琉球文化との深い関わりを物語っています。

この神アサギはユニークな形状の建物です。一般に五坪程度の寄棟の茅葺きの建物で、丸木や石柱で支えられ、壁や戸もなく、床はない地面です。出入りするには腰を屈めなければならないほど軒が低いのが特徴です。本島北部地域では軒が低いのにに対し、奄美諸島では軒が高い

という違いがあります。軒が低い理由としては、牛や馬、鳥などが聖なる神アサギに入らないようにとか、ムラの神役が行う神聖な祭祀儀礼を外部から見られないように配慮したものなどと説明されます。

アサギ(アシアゲ)の語源の説明としては、『古事記』などに登場する建物様式に由来し、屋根の軒が垂れ伏せた状態から足をあげる様からの「足揚げ」、「アシー(神への食物)アゲ(上げ)」の意とする意見があり、まだ定説はありません。

神アサギの内部にはタモト木と呼ぶ自然木が横たえられ、その前に香炉があるくらいです。祭事の際、ノロなどの神役が着座する場所はタモト木付近などと定まっています。当日参加できない神役の座は空けられます。また、かつて出席する神役は特定の衣装や冠り物もしたりするなどの慣例もありました。

通常、神を祀る御嶽には女性しか入ることができないため、神アサギはムラをあげての感謝・祈願に際して、すべてのムラ人が参加できるように設けられていたともいわれ、ムラの代表の男性達も下座に座ります。このように神アサギは村落としての共同祭祀場的な性格を強く示しています。

近年は、伝統的な造りの神アサギは軒の高いコンクリート製に造り変えられ、大きく変容する傾向にあることから、文化財として指定・保存される意義は大きいといえます。



伊平屋村島尻の  
神あしあげ

# やぶ はちがつおど 屋部の八月踊り

県指定

●指定年月日 / 1988(昭和63)年1月12日 ■保存団体 / 屋部踊り団

●所在地  
名護市宇屋部●祭事期日  
旧暦8月7日～11日

屋部の八月踊りの準備は、旧盆前後の「ミンクパイ」の日から始まります。ミンクパイ(面配り)とは、その年の八月踊りの演目と出演者を決定することです。その日に「屋部踊り団」が結成され、八月踊りのすべてを取り仕切ります。

ミンクパイの翌日から稽古が始まり、旧暦8月7日は「メージュクミ」や「メーズクミ(前仕込みの意味)」あるいは「クンジジメー(紺地仕舞)」ともいい、紺地の着物を着て舞台の総稽古を行います。8月8日は「スクミ(仕込み)」といい、化粧をし、衣装も着て舞台稽古が行われます。

旧暦8月10日は「ショーニチ(正日)」

といい、ノロやその他の神役たちは、各自のムトゥ(本家)で神衣装を着てウカマ(火の神)に祈願をした後、アサギに集まります。その後、ヌンドゥルチ(ノロ殿内)、ニガミ(根神)、サグン神屋敷で祈願をして、再びアサギに戻ります。

神役たちが最初にアサギに集まった後、芸能出演者たちは旗頭を先頭にして村落内を練り歩き(道ジュネー)、途中で「稲摺節」を踊ります。その後、アサギ庭に戻り、舞台上で「長者の大主」「こてい節」「稲摺節」を踊ります。そして、夕方から夜遅くまで、舞台では舞踊、狂言、組踊など約20～25



道ジュネー



道ジュネーでの稲摺節

演目が上演されます。

8月11日は「ワカリ(別れ)」といい、ショーニチと同様の舞台芸能を披露します。翌日から、踊りの衣装や道具の手入れをして片付け、1、2週間後に「ワカリザ

ンカイ(分散会)」という慰労会が催されて八月踊りは終了します。

屋部の八月踊りは、沖縄の村踊り(村遊び)の形をよく残しており、本島の祭祀や民俗芸能を知る上でとても貴重なものです。



長者の大主



スンドー



五福の舞



手間戸(ティーマートゥー)



組踊「本部大主」

## 用語の解説



### 狂言

日本の古典芸能の一つで、笑いを通して表現するせりふ劇。沖縄の民俗芸能にも演目のジャンルとして取り入れられている。八重山諸島ではキョングンと呼ばれ、広く演劇や芸能を指す。その内容は、豊穣や子孫繁栄などを予祝・祈願するものが大部分である。笑し狂言は、笑いをテーマにした娯楽的な内容となっている。

### ヌドゥルチ(ノロ殿内)

P227用語解説参照

### ニガミ(根神)

P227用語解説参照

### サグン神屋敷

P225用語解説参照

# 宜野座の八月あしび

国選択

● 選択年月日 / 2005(平成17)年2月21日 ■ 保護団体 / 宜野座区、宜野座区二才団

● 所在地  
宜野座村字宜野座

● 祭事期日  
1年おきの旧暦8月15日(西暦偶数年に開催)

宜野座村字宜野座では、1年おきの旧暦8月15日に、収穫を感謝し、これからの豊穰を願って、地区内の広場に組み立てられたバンク(仮設舞台)を中心に様々な芸能が演じられます。

宜野座区では、区の青年会及び成人会会員で組織された宜野座区二才団が中心となって、八月あしびを行います。二才団には、組踊・舞踊・劇・棒の4つの部があり、団員はいずれかの部に所属して、芸能の演じ手となります。

バンクでの芸能が演じられる前には、演者たちにより集落内を練り歩く道ズネーが行われます。バンクでの芸能は、最初に舞い方と獅子で場を清め、ミルク(弥勒)の踊りでユガフ(世果報)を招きます。その後、組踊や舞踊などの芸能が次々と演じられ、最後に再び獅子舞を演じるという構成になっています。

宜野座の八月あしびは、組棒やスーマチ(スー巻き)などの棒の演技、組踊や歌劇、狂言など、多様な芸能を伝承しています。また、舞踊の「蝶千鳥」や、かつて沖縄で行われていた祝福芸の様子を伝える「京太郎」など、他に伝承の少ない貴重な演目も含まれている民俗芸能です。

国選択記録作成等の措置を講ずべき無形の民俗文化財



拝所のヌンドゥルチでの祈願と奉納芸能



拝所のヌンドゥルチ前でのスーマチ



演者たちによる道ズネー



獅子舞





蝶千鳥



京太郎



組踊「伏山殿討」



ミルク(弥勒)

## 用語の解説



### ミルク(弥勒)

釈迦滅後に弥勒菩薩がこの世に降り人々を救うという仏教信仰が、沖縄に古くからある来訪神信仰と結びついたと考えられる。沖縄本島や八重山各地で、豊年祭や節などに、ミルクと呼ぶ弥勒が来訪神として現れ、豊年をもたらすとされている。

### ユガフ(世果報)

沖縄・奄美において、豊年・豊穰・幸福などを意味する。

### 狂言

日本の古典芸能の一つで、笑いを通して表現するせりふ劇。沖縄の民俗芸能にも演目のジャンルとして取り入れられている。八重山諸島ではキョングンと呼ばれ、広く演劇や芸能を指す。その内容は、豊穰や子孫繁栄などを予祝・祈願するものが大部分である。笑し狂言は、笑いをテーマにした娯楽的な内容となっている。

### 祝福芸

祝福や祝いの言葉などを内容とする芸能のこと。

### 拝所

御嶽や祭場、井泉など、祈願し拜む場所を総称して用いられる。

# 宜野座の京太郎

県指定

●指定年月日 / 1985(昭和60)年10月8日 ■保存団体 / 宜野座区二才団

●所在地  
宜野座村字宜野座

●祭事期日  
旧暦8月15日(豊年祭)

京太郎は、家々を回りながら祝福芸や念仏、人形芝居などを演じた人々やその芸能のことです。琉球国時代、京太郎の演じ手たちは、首里郊外の安仁屋村に住み、士族の屋敷や村を訪れ演じていました。彼らは、フトッキーという人形を操る芝居や本土の春駒、升斗舞、鳥刺し舞などと同系統の踊りを演じていました。次第にその芸を保持していた集団が解体し、芸も消滅しかけていた1900年頃に、首里の寒水川芝居において舞台芸能として再演されました。宜野座の京太郎は、明治時代(1868～1912年)の中頃、寒水川芝居出身の渡久地武恭によって宜野座に紹介され、1900



馬舞

(明治33)年、旧暦8月15日の豊年祭で舞台芸能として演じられたのが始まりです。

出演者は、胸の前に馬の頭部の形をしたものを付けた馬舞者1人、胸の前に締太鼓を付けて撥を持った太鼓打ち1人、踊り手8～12人(偶数人数)となっています。演目は5つあり、馬舞者を先頭に太鼓打ち、踊り手が下手より太鼓と三線に合わせ「早口説」を歌いながら登場します。そして、太鼓のリズムに合わせて「扇子の舞」「御知



扇子の舞

行「鳥刺し舞」を踊り手が演じ、続けて馬舞者が「馬舞」を演じます。歌詞に意味不明なところもありますが、本土の鳥刺し舞などにみられるような頭韻法、畳句、数え歌形式の古い形をよく残しています。

京太郎は、その様式の一部が組踊や歌劇、民俗芸能にも取り入れられるなど、芸能の移り変わりの過程を示すものとして価値があります。



御知行



鳥刺し舞 (写真提供：宜野座村教育委員会)

## 用語の解説



### 祝福芸

祝福や祝いの言葉などを内容とする芸能のこと。

### 春駒

新年に家々を巡る門付芸のひとつ。木で作った馬の首形を手に持ち、また胴の前後に首と尾をつけて、三味線・太鼓などで囃しつつ、祝言の歌を歌い、舞う。

### 升斗舞

門付けの万歳芸で、めでたい歌詞で幸運を祈る祝福芸。

### 鳥刺し舞

長い竹棹の先に鳥もちを付けて、それを投げ上げて小鳥を捕獲した鳥刺しの様子を踊るもの。

### 寒水川芝居

沖縄県設置後の1892(明治25)年頃、職を失った首里士族たちによって、首里寒水川村(那覇市首里寒川町)に建てられた芝居小屋。

### 頭韻法

連続する単語が同じ音の子音または文字で始まる手法。

### 畳句

同一の句を重ねて用いる手法。

# いへやそんがきやかみ 伊平屋村我喜屋の神あしあげ 県指定

●指定年月日 / 1977(昭和52)年7月11日 ■所有者 / 我喜屋区

●所在地  
伊平屋村字我喜屋

我喜屋の神アシアゲは、集落の北のはすれのイリ(西)の殿内にあり、地元では単に「アサギ」や「地アサギ」と呼ばれ、我喜屋の主な祭祀を行う時に使用される建物です。この神アシアゲの隣には、ノロの屋敷跡があります。

この神アシアゲが造られた年代は不明ですが、4本の柱の上にイヌマキなどの島内産の木材を用いた小屋組があり、屋根はススキで葺かれています。伝統的な様式に従って、軒がとても低い点が特徴です。

近年、次第に伝統的な様式の神アシアゲが消失していく中で、我喜屋の神アシアゲは伝統的な様式を備えた数少ない建物であり、学術上も貴重なものです。



## 用語の解説

### 殿内

一般には地頭以上の役職にある家のことであるが、伊平屋島の我喜屋の場合は、昔役人の職にあった旧家を指す言葉として用いられているようである。

### ノロ

奄美・沖縄諸島で村落祭祀を執り行う最高位の女性神人のこと。ヌルとも呼ばれる。根神や他の神役たちを執りまとめて、祭りを執り仕切る。琉球国時代は王府から任命され、土地も与えられた。中には複数の村の祭祀を執り行うノロもいる。

### 軒

屋根の下端のことで、建物の壁から張り出した部分を指す。風雨や日光をよける役割がある。

いへやそんしまじりかみ  
伊平屋村島尻の神あしあげ

県指定

●指定年月日／1977(昭和52)年7月11日 ■所有者／島尻区

●所在地  
伊平屋村字島尻

島尻の神アシアゲは、村の中央にある殿内と呼ばれる石垣に囲まれた拝所(神を祀って拝むところ)の中にあります。地元では「アサギ」と呼んでいて、島尻の主な祭祀を行う時に使用される建物です。この神アシアゲの隣には、ソーグシク、メー屋、メー田という神事にかかわる重要な3軒の

旧家(古くから続いている由緒ある家)があります。

この神アシアゲが造られた年代は不明ですが、四角に加工された自然石8本を柱にし、小屋組は島内産の木材を用い、屋根はススキで葺かれています。伝統的な様式に従って、軒がとても低い点が特徴です。

近年、次第に伝統的な様式の神アシアゲが消失していく中で、島尻の神アシアゲは伝統的な様式を備えた数少ない建物であり、学術上も貴重なものです。



神あしあげについては、P113のコラムに詳しい解説があるよ。



い ぜ な そん し ょ み か み つ け た り は い し ょ  
**伊是名村諸見の神アサギ附拝所** **県指定**

●指定年月日 / 1994(平成6)年2月4日 ■所有者 / 伊是名村

●所在地  
 伊是名村字諸見

諸見の神アサギは、伊是名村諸見集落の北東端にあつて、尚円王生誕地屋敷跡に隣接しています。8本の石の掘立柱の上に、島内産の木材を用いた小屋組があり、屋根はススキで葺かれた茅葺きで、寄棟造りとなっています。軒の高さは約80cmと低く、壁はなく、内部は約5坪(約16.52㎡)

の土間になっています。ここでは三月ウマチー、六月ウマチー、チカドゥイ(束取)、ウンザミ(海神祭)、シヌグ、ティルクグチ、イルチャヨーなどの祭祀が行われます。

諸見の神アサギは、神アサギの伝統的な建築様式を備え、古くから村や字の祭祀儀礼が行われてきた場所として重要であり、学術上貴重なものです。



(写真提供：伊是名村教育委員会)

用語の解説



寄棟造り

屋根の頂部の両端から四方に棟(2つの屋根面が接する部分)が下りる形式の屋根。屋根面は、台形と三角形が2つずつとなる。

軒

屋根の下端のことで、建物の壁から張り出した部分を指す。風雨や日光をよける役割がある。

土間

屋内で床板を張らず、地面のままになっているところ。

●指定年月日／1994(平成6)年2月4日 ■所有者／仲田区

●所在地  
伊是名村字仲田

仲田の神アサギは、伊是名村仲田集落の西寄りの、屋号「仲田アサギ」の前庭にあり、祭祀に使用される建物です。4本の石の掘立柱の上に島内産の木材を用いた小屋組があり、屋根はススキで葺かれた茅葺きで、寄棟造りとなっています。軒の高さは約80cmと低く、壁はなく、内部は約7坪(約23㎡)の土間になっています。アサギ

内部の北側中央にクサティイシ(腰当石)があります。ここでは三月ウマチー、六月ウマチー、チカドゥイ(束取)、ウンザミ(海神祭)、シヌグ、ティルクグチ、イルチャヨーなどの祭祀が行われます。

仲田の神アサギは、神アサギの伝統的な建築様式を備え、古くから村や字の祭祀が行われてきた場所として重要であり、学術上貴重なものです。



(写真提供：伊是名村教育委員会)

神アサギについては、P113のコラムに詳しい解説があるよ。



## 用語の解説



## クサティイシ(腰当石)

用語集 P225参照

## 三月ウマチー

用語集 P225参照

## 六月ウマチー

用語集 P229参照

## チカドゥイ(束取)

用語集 P226参照

## ウンザミ(海神祭)

用語集 P224参照

## シヌグ

用語集 P226参照

## ティルクグチ

用語集 P227参照

## イルチャヨー

用語集 P224参照

# 伊是名村伊是名の神アサギ附拝所 県指定

●指定年月日 / 1994(平成6)年2月4日 ■所有者 / 伊是名村

●所在地  
伊是名村字伊是名

伊是名の神アサギは、伊是名村伊是名集落の東寄りにおいて、祭祀に使用される建物です。8本の石の掘立柱の上に、島内産の木材を用いた小屋組が乗っており、屋根はススキで葺かれた茅葺きで、寄棟造りとなっています。軒の高さは約60cmと低く、壁はなく、内部は約5坪(約17㎡)の土間

になっています。アサギの東側にはシヌグの時に拝礼される(拝む)神石があります。ここでは三月ウマチー、六月ウマチー、チカドゥイ(束取)、ウンザミ(海神祭)、シヌグ、ティルクグチ、イルチャヨーなどの祭祀が行われます。

伊是名の神アサギは、神アサギの伝統的な建築様式を備え、古くから村や字の祭祀が行われてきた場所として重要であり、学術上貴重なものです。



## 用語の解説

### 寄棟造り

用語集 P229参照

### 軒

用語集 P227参照

### 土間

用語集 P227参照





●指定年月日／1994(平成6)年2月4日 ■所有者／伊是名村

●所在地  
伊是名村字勢理客

勢理客の神アサギは、伊是名村勢理客集落の北東端にあつて、祭祀に使用される建物です。4本の石柱の上には、島内産の木材を用いた小屋組が乗っており、屋根はススキで葺かれた茅葺きで、寄棟造りとなっています。軒の高さは約60cmと低く、壁

はなく、内部は約5坪の土間になっています。ここでは、三月ウマチー、六月ウマチー、チカドゥイ(束取)、ウンザミ(海神祭)、シヌグ、ティルクグチ、イルチャヨーなどの祭祀が行われます。

勢理客の神アサギは、神アサギの伝統的な建築様式を備え、古くから村や字の祭祀が行われてきた場所として重要であり、学術上貴重なものです。



(写真提供：伊是名村教育委員会)

## 用語の解説



## 三月ウマチー

用語集 P225参照

## 六月ウマチー

用語集 P229参照

## チカドゥイ(束取)

用語集 P226参照

## ウンザミ(海神祭)

用語集 P224参照

## シヌグ

用語集 P226参照

## ティルクグチ

用語集 P227参照

## イルチャヨー

用語集 P224参照

# 伊江島の村踊

国指定

●指定年月日 / 1998(平成10)年12月16日 ■保護団体 / 伊江村民俗芸能保存会

●所在地  
伊江村

●祭事期日  
毎年11月中旬

●その他  
1976(昭和51)年12月25日に「記録作成等の措置を講ずべき無形の民俗文化財」として国に選択

伊江島の村踊は、本土の芸能や他地域の影響を受けて、島独自の発展をとげた民俗芸能です。琉球国時代、領主が薩摩や江戸へ行く時に島の優秀な若者がお供をし、彼らが見聞きした様々なヤマト歌や踊りを取り入れ、三線の曲に乗せた独自の振り付けが作られたといわれます。また、島の学問所である会所で学ぶ青年たちが、地元で伝承される民謡に踊りを付けて披露していたものも村踊に組み込まれたとされています。

村踊は、ニセウドゥイ(二才踊)といわれる青年踊りで、島で作られた踊り、沖縄本島や他地域から伝わってきた踊り、本土の影響を受けた踊りの3つに分けられます。その踊りには、足首を曲げるなど独特の所作があり、衣装も黒の羽織に紋付を着るな



西江前区「あかきな節」

ど、他地域に見られない特色があります。

村踊には、舞踊だけではなく組踊もあります。なかでも「忠臣蔵」は、1748(寛延元)年に大坂(現在の大阪)の竹本座で初演された『仮名手本忠臣蔵』をもとに、1840(天保11)年に同村の上地太郎が独自に作ったものと伝えられています。

伊江島の村踊は、本土の芸能や他地域の芸能を受け入れ、独自のものに工夫してきた民俗芸能であり、芸能の移り変わりを知る上で、とても重要なものだといえます。



真謝区「砂持節」



西江上区「嬉し目出度や」



相踊「忠臣蔵」  
 (写真提供：伊江村教育委員会)



阿良区「按司添前」  
 (写真提供：伊江村教育委員会)



西崎区「見れば」



川平区「大中桃原」



東江上区「シテナ節」



東江前区「国頭さばくい」

